

人工血管を用いた透析患者のシャント管理

小澤政豊、山岸 剛、藤田康雄
秋田赤十字病院 腎センター、同 内科

<はじめに>

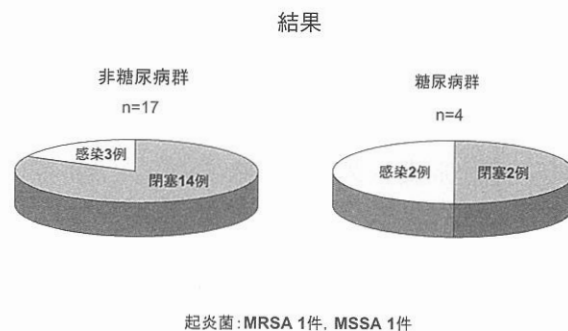
近年、透析患者の高齢化、糖尿病性腎症の透析導入例の増加に伴い、自己血管にて内シャントを造設できず人工血管を用いる症例が増加している。しかし、人工物を用いたシャントは自己血管に比し、血栓による閉塞や感染といったトラブルが多いという欠点がある。当院においてもこのようなトラブルを多数経験したので、今後のシャント管理向上のため内容を調査、検討した。

<研究対象および方法>

平成12年2月より平成18年10月までの6年8ヶ月間に、当院においてグラフト内シャントを用いて透析を行った12症例に対し Retrospective Cohort study を行った。内わけは男性8名、女性4名。原疾患は慢性腎炎4名、糖尿病性腎症4名、IgA 腎症1名、膜性腎症1名、多発性のう胞腎1名、腎結核1名。平均透析歴は10年2ヶ月であった。

グラフト種はソラテックグラフト11名、ハイブリッド PTFE グラフト1名。移植部位は左前腕11名、右上腕1名であった。

<結 果>



6年8ヶ月間でグラフト内シャントに関わるトラブルは全21件。内わけは血栓によるシャント閉塞が16件、グラフト感染が5件であった。シャント閉塞16件中、9件が同一患者に生じたもので、慢性腎炎にて左前腕にソラテックグラフトを用いてループ状に内シャントを造設したが静脈吻合側にて狭窄をきたし stenting されている症例であった。また、グラフト感染例において2例で起炎菌が判明しており、MRSA 1件、MSSA 1件であった。

原疾患とシャントトラブルの関連については、非糖尿病群で8症例においてシャント閉塞14件・感染3件。糖尿病群では4症例においてシャント閉塞2件・感染2件で、シャント閉塞に関しては非糖尿病群が高く、グラフト感染に関しては糖尿病群での発生率が高かった。

